29

高峰譲吉いわく、私は適塾生だった

中山　沃
川崎医療福祉大学

平成十六年は、タカジアスターゼ、アドレナリンの発見者高峰譲吉博士（一八五四―一九二二）の生誕百五十年ということで、国立科学博物館で生誕百五十年記念展が同年十二月一〇日から翌年一月十日まで開催された。高峰はこのアドレナリン発見で大正元年（一九一二）帝国学士院賞を授与された。しかしアドレナリンの結晶を抽出する実験を直接担当したのは、兵庫県有馬郡名塩村（現西宮市名塩）生まれで、大阪薬学校出身の上中啓三（一八七六―一九六〇）である。このアドレナリン抽出実験のノートは上中啓三氏の次男三男二氏より教行寺（演者の自坊）に寄付され、今回の記念展を期に、国立科学博物館によって複刻された。

これまで諸種の高峰博士の伝記が書れているが、適塾入門に関しては、その根拠の確たる資料は提示されていない。そこで演者は、高峰が自ら適塾で学んだと語っている資料と傍証の高峰旧蔵の資料を紹介する。

高峰はアドレナリン発見の二年後の明治三五年（一九〇二）にアメリカから帰国、同年四月二〇日に開催された大阪医学会例会で「自家発見タカヂアスターゼ及びアドリナリンに就て」と題して講演した（当時はアドリナリンと命名）。この講演内容が大阪医学会雑誌第一巻第十号（明治三五年五月十一日発行）に速記文が掲載されている。この時、直接実験は上中が担当していることについては、全く語っていない。この講演内容の一部を紹介する。

「前略―殊に私は大阪の地に於きまして、有力なる諸君へ御目に懸りまするのは、尚更嬉しく覚えまする、何故かと申しますると、明治初年のころ、確か明治二、三年でありましたか、余程旧いから忘れるくらひでございます、その時分昔から当地にお在でになりまする緒方洪庵先生の塾に居りました、則ち只今緒方病院に居られまする緒方収二郎さん（洪庵の末子、一八五七―一九四二）などと御一緒に御厄介になったこともあ

りまする、夫れから大阪に医学校と云ふものが興りました（明治二年二月開校）が、私の先代が二代医者でありましたから、私も亦其業を襲ひてやる存念でありまして、其後医学校へ通学をいたして居りました（以下略）」。またこの講演の日に行われた博士の歓迎会の記事が、翌日の大阪朝日新聞の欄外記事として掲載され、高峰は「自分は少壮より当地の緒方塾に学び大阪は第二の故郷たる関係あり」と述べたとしるされている。

明治二年ころは、適塾で緒方惟準の義弟緒方拙斎が開業しており、洪庵夫人八重、収二郎、重三郎らが同居、この二人は春から英語学校でフランス語を習っている（八重から大聖寺の適塾門人渡辺卯三郎への書簡―同年八月）。緒方惟準は同年二月、大坂仮病院設立のため東京より帰坂、大坂の旅館住まいであった。

傍証として、高峰が適塾時代に旧蔵していたと思われる書籍、慶応三年（一八六七）、江戸の幕府の開成所が複刻した「ENGLISH GRAMMAR英吉利文典」が名塩の弓場家（代々庄屋で、五郎兵衛を襲名、儒者広瀬旭荘の日記「日間瑣事備忘」の名塩紀行の中に、しばしば名がみえる）の古文書の中から発見された。この本の白紙の部分に、This book belong to J・K・Takamineと筆記体で書かれている。緒方家と弓場家とは姻戚関係にあり、洪庵が弓場五郎兵衛から五十両の借金し、嘉永二年（一八四九）十二月二九日に返済した文書も存在する。また当時の弓場家の当主弓場五郎為政は適塾高弟伊藤慎蔵が名塩で塾を開いたときに門人となり、経済的援助もおこない、伊藤が慶応二年（一八六六）筆算提要を出版したとき、校訂者として名を列ねている。これらの資料から、高峰が適塾で学んだ事実を推論したい。